

死をどのように考えてきたのか⑥

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

グライ・ラマ 14 世は、輪廻とはすべての生きるものに起こっている継続して回りつづける生命の輪であること、輪廻転生は、生きとし生ける存在に対して、そもそも与えられ、個々の到達した内面、もしくは実践の高さによっては、次の生命を自ら選び取ることが可能だということを意味すると説いています。また、生命は無限であり、始まりも終わりもない。よって、行為、カルマ（業）もまた始まりもなく、終わりもない。カルマは無量大で、その無量大の無数のカルマのひとつひとつが、それぞれ新しい生命を生み出す力を秘めているとも説きました。そのカルマのなかで決定なカルマとは、より死に近い時に行った行為や馴れ親しんだ行為であって、死に際に憎しみや恨みなどの悪い感情を抱くとそれまでの良い行為との平衡は失われてしまうので、死を迎えるときの思いの重要性を言っています。

こうして、死は生とともにしか語られないということがより鮮明になってきました。まさに、生と死は渾然一体となっているということができるといえるでしょう。また、死は生と生との区切りになっているとも語られました。そして、カルマ（自分が行ってきたことの総体とその影響力）と死あるいは生とのかかわりを思えば思うほどに、実は、死こそが、「何の為に生きるのか」という問題をとく鍵となっていることが見えてきます。死とは、生きるという過程の一部としてとらえることができるともいえます。また、生と死は、同じひとつの過程における両面とも譬えられるでしょう。死は、生きる意味を理解することにつながっています。

生老病死と死

仏教は、人間存在を「苦」と見て、基本的な「苦」として、生苦・老苦・病苦・死苦（四苦）を掲げています。生まれること（そして、生きること）は苦であり、老いることは苦であり、病むことは苦であり、死ぬことは苦であると考えます。ところで、この考え方が輪廻という生きものの生死のあり方から、この四苦は一つのものと言っていいのかもしれませんが、なぜなら、「生」の中に「死」があるからです。

生きているものは、生まれた瞬間から「死」ぬことになっています。言い換えれば、生は死を内包して存在していることになります。ですから、生きていくことは死に向かって進んでいくことになり、死の視点から見れば「死の過程」となります。しかも、その過程は不可逆的、元には戻らない一方的な歩みです。ですから、老いが進み切ってしまうと死が訪れるということになります。同様に病気が進行すると死に達することにもなります。まさに、生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること、死は生から切り離せません。また、死ぬことは老いること、老いることが生きることであるように、病むことが生きること、死ぬことであって、「生老病死」が一つのこととなって、人間は生きています。

このような死について、宗教は、死とは何かということを経験するというだけのものではなく、たとえば、死を苦だと教えたら、その苦しみを克服する方法も教えてきました。インドの思想伝統は、それを乗り越えよう、超越しようとして、輪廻の思想を

生んだわけですが、生きているときにどのようにしたらよいのかということで、前述のカルマ（業）の思想（たとえば、自業自得：自分で行った行為の結果はその行為者が受け取る、因果応報：原因に応じて結果が生じるなど）を展開してきたこととなります。

そうした思想背景をもつ社会で生きたブッダは、私たちの存在の真実の根本を「苦諦（人生は苦である）」とし、そしてその苦の原因をさぐっていきました。そして、ごく簡単に言ってしまうと、苦の原因は私たちの欲望（執着）であると説き、その欲望をできるだけ小さくしていけるよう八正道の生き方を教えます。欲望・執着・煩惱から解放され、輪廻の束縛を離れて、解脱する方法としました。

ブッダが示した四苦あるいは八苦（生老病死に「愛別離苦：親愛な者との別れの苦しみ」、「怨憎会苦：恨み憎む者に会う苦しみ」、「求不得苦：求めているものが得られない苦しみ」、「五蘊盛苦：心身を形成する5つの要素から生じる苦しみ」を加えたもの）は、私たちの力ではどうしようもないもの、思い通りにはならないものでもあります。いくら努力しても死からは免れません。老いから逃れることもできないし、病気にならないうで済むこともできません。思い通りになれば、苦しむこともないのかもしれませんが、私たちは、ほんの些細なことであっても、気に病んでしまうことがしばしばです。思い通りにならないのに思い通りにしようとする、苦しくなる。そうであるなら、思い通りにならないことを、そのまま受容して、そして生きるということになるのでしょうか。だから、いのちは尊いものだと感じます。

不殺生戒

人は、時として、自らの死の過程（＝生の過程）を断つことがあります。仏教では、在家の信者が守るべき戒めとして、不殺生戒・不偷盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒の5つの戒律を説いてきました。不殺生戒は、「殺してはならない」ということです。ですから、自らのいのちを断つことは、自らの仏性の可能性を断つということでもあって、戒められていると考えていいと思われれます。大乘仏教では「一切衆生悉有仏性」（すべての生命あるものは悉く仏性を有している）と説いて、衆生は人間だけではなく、ありとあらゆる生きものを含むと解されていることから、純粋に考えれば、あらゆる生きものを殺してはいけないということになります。

また一方で、「捨身」（身を捨てて他の生物を救い、仏に供養する布施行の一つ）という考えがあって、これは自らのいのちを捧げる行為を布施行とするものです。さらに死にいたることのある断食という行と自殺とはどのように考えていったらいいのでしょうか。

グライ・ラマ 14 世は、「一般的に、仏教の世界観と照らし合わせて、自殺は悪しき行いである」と説く一方で、「自殺はなべて悪であるとは言い切れない。ある特定の、ひじょうに限定された状況において、自殺は許される行為となりうることを言うておかねばならない」（グライ・ラマ『「死の謎」を説く』角川書店、平成 20 年、45 頁）とも語っています。